

図書紹介

C. C. Webster & P. N. Wilson. *Agriculture in the Tropics*. London : Longans, Green and Co. Ltd., 1966. ix+488 p.

熱帯農業については、なんといっても、イギリス人が最も豊富な経験をもつ。

ここに紹介する「熱帯農業」の共著者のひとり C.C. Webster 博士は前マラヤゴム研究所長であるが、マラヤ以外、ケニア・西インド諸島・タンガニカにも勤務し、過去32年にわたって熱帯農業にとりくんできている。もうひとりの共著者 P.N. Wilson は現在 Unilever の研究室に働いているが、過去13年、東アフリカの Makerere 大学および西インド諸島大学で熱帯畜産学を講じてきた。

イギリスの熱帯農業についての過去の業績を背景として、著者のこの現地研究にもとづく、熱帯農業の概説書が本書である。現在の日本の熱帯農業研究の水準にくらべ、はるかに高いものであることを、残念ながら認めないわけにゆかない。

本書は、熱帯農業の基礎的な諸条件を明らかにし、熱帯の作物栽培および家畜飼養改善のための、既知の農業技術研究の総括を目的としている。

したがって、その内容として、まず熱帯農業の自然的条件である気候（気候型・降水・湿度・気温・日照）、土壌（熱帯土壌調査と分類・丘陵地傾斜地低台地の土壌・沖積平地と低テラスの土壌、なおこの章だけは H. Bine 博士の執筆）および植生（主要植生形態）をとりあげる。つぎに社会的要因として、技術水準・社会構造・伝統と信仰・人口密度と分布・健康と栄養・土地制度と相続を考察する。

本論に入って、熱帯農業において、きわめて重要な問題である土壌および水保全が最初に考察される。つぎは、開墾・耕起および雑草駆除の章となる。これをうけて、一年性作物栽培における肥沃度維持の問題となる。これは3章にわかれ、移動（焼畑）耕作、移動耕作の改善形態、水稻生産なる永久的作付形態のそれぞれにおいて、地力維持方法が分析される。転じて、樹木および灌木作物、すなわち熱帯農業の重要部

門である樹園作物の考察となる。ついで熱帯農業の、もうひとつの部門である自然草地在り自然草地の形態・放牧による利用の2章にわかって検討される。これに飼料作物の栽培と牧草地の章がつづく。最後は家畜飼養についてであって、熱帯家畜の種類、家畜の熱帯環境への適応、熱帯における家畜管理、熱帯における家畜改善の3章があてられる。

本書は、個別の作物や個別の家畜についての説明はそれぞれの専門書にゆずることにしている。（たとえば、これがその1冊である Tropical Agriculture Series にしても、ココヤシ、茶、米、熱帯内陸漁業、熱帯養蜂、ココア、熱帯畜産入門などの諸書の刊行を見る）。したがって、巻末に30ページにわたっての参考文献目録がつけられており、より詳細な研究への手引きとなっている。

わたくしは、本書は熱帯農業概論書として最もすぐれたもののひとつであると思う。もちろん、広く熱帯全般についての敘述であるだけに、東南アジア農業としては不十分であることはいうまでもない。しかし、東南アジアの農業を理解するために、ここに強調されているプリンシプルは、きわめて有効に役立つにちがいない。その意味で、東南アジア農業の関係者にも、ぜひとも一読をおすすめしたい。（本岡 武）

Nicholas Tarling. *Southeast Asia, Past and Present*. Melbourne : F.W. Cheshire, 1966. xvi+334 p.

著者 Tarling 博士は、2年ばかり前に、京大東南アジア研究センターを訪れられた。そのときは、オーストラリアの University of Queensland の東南アジア史担当講師で、すでに、

British Policy in the Malay Peninsula and Archipelago, 1824-1871, 1957.

Anglo-Dutch Rivalry in the Malay World, 1780-1824, 1962.

Piracy and Politics in the Malay World, 1963.

などの、マレー世界の近代史の研究を発表されていた。

博士は、その後、ニュージーランドに移り、現在 University of Auckland の Associate Professor of History であるが、最近、東南アジア史概説としての本書を出版された。

オーストラリアおよびニュージーランドが、東南アジアにいたく関心は、ちかごろ、めざましい。両国がマレーシアをイギリスに代わって積極的に支援しようとする動きについては、私は本誌前号で、クアラルンプール会議出席の感想として述べたところである。また、この10月のジョンソン大統領のマニラ会議出席直前の、両国訪問によっても明らかであろう。

本書はこのような要請に応じて出版されたものである。東南アジア史概説として本書の特色をなすのは、その時代区分である。1760年をもって、転機とする。したがって、第1編は1760年までの東南アジアをとりあつかう。第2編は1760年から日本の南方作戦のはじまる1942年までの東南アジアとりあげる。この時代を、さらに、第1部の植民的統治構造の形成、第2部の民族主義と自治主義とに分ける。第3編は1942年以後の東南アジアを、国ごとに略述する。

本書のひとつの特徴は、東南アジアのなかに、インド共和国に属するアンダマン・ニコバル諸島を含ませていることである。たしかに東南アジア史を理解するためのおもしろい試みだ。

しかし、オーストラリアおよびニュージーランドの読者を対象としながら、両国と東南アジアとの関係について触れるところが少ない。もちろん、この関係が、歴史的にそれほどなかったといえ、それまでのことだ。しかし、少なくともインドネシアとオーストラリアとの関係は、戦後、はなはだ微妙なものであった。具体的にいうと、西イリアン帰属問題をめぐって、オーストラリアはインドネシアに心よくなかったのは事実である。また、インドネシア・マレーシア対決問題にたいし、オーストラリアのマレーシアへの陰に陽にの援助は忘れられてはならない。その意味で、本書は東南アジア史概説としては、きわめてまとまりのよいものであるが、とくにこのオーストラリア・ニュージーランドと東南アジアとの関係に興味をもつものとしては失望せざるをえない。著者が、近い将来、この視点からの研究を公刊されることを切望する。なぜなら、

それが東南アジアの将来を読みとるための、ひとつの鍵なのだから。(本岡 武)

Robert J. Muscat. *Development Strategy in Thailand, A Study of Economic Growth*. New York: Frederick A. Prager, 1966. xvi + 310 p.

タイ経済の最近のめざましい発展は、低開発国のモデル・ケースとしても、注目されなければならない。わたくしは、本書はタイ経済発展を真正面からとりあつかった出色の研究であると思う。

その理由は2つ。第1は著者の1957年から62年に至る5カ年のUSOM (United States Operation Mission of the International Cooperation Mission, 現在のThe Agency for International Development)のスタッフとしての実験の経験。第2は、それだけに、いかなる経済開発戦略が必要であるかとの、さしせまった要請。したがって、本書はきわめて現実的である。にもかかわらず、この国での、経済計画にたちいっての著者の経験は、かなりの体系的な思索を必要ならしめている。

本書の構成を紹介すると、第1章はタイ経済発展のこれまでのpatternをとりあつかう。この場合、Ingramの著作に教えられるところが多い。第2章から、かれの本格的な仕事となり、まず1953年以後のタイ経済の成長変化を概説する。第3章は農業発展の動態と題し、きわめてめざましい発展をとげている農業の諸様相、たとえば米作、畑作、市場機構、租税体系、技術変化などをとりあげる。第3章は工業部門。第5章が開発戦略の結論となる。

開発戦略としては、現在のタイのとっている方針に、だいたい全面的に賛成している。つまり、自由主義経済を基調として、必要なぎりぎり政府が干渉するとのそれである。わたくし自身、その大すじについては、ほぼ同感であるが、ただ、政府のはたしてきた役割についての、現実にもとづく批判の少ないのを、あるいは点のあますぎるのを遺憾に思う。

いろいろと興味ある点が多い。たとえば、タイ経済発展の要因として、中国人のタイ化をあげているのは、ひじょうに同感だ。しかし、タイ経済の今後の見とおしとして、若い政府のエリート層をあげている

のは、見方によって、意見が異なる。あるいはまた、東北タイや南タイの共産主義ゲリラの動きを、ひじょうに大きくとりあつかっているが、はたして、実態がそうかどうか、問題となる。とにかく、稀にみるほど Controversial な書物である。

この Controversial なことの原因としては、あまりにもアメリカの援助計画担当者的な視点が強いこと、これと関連して、ともすればバンコクにおける見方にかたより、村落段階が軽視されてきたこと、あるいはマクロ的考察が勝ちすぎて、ミクロ的観察が軽視されていることなどがあげられよう。その敘述のなかには、まったく鋭い分析だと思われる点もあれば、あまりに幼稚だと感じないわけにゆかない点もある。

なお本書は、Prager Special Studies in International Economics and Development の 1 冊である。こうした実地経験にもとづく低開発国経済研究がつつぎ出版されることを期待する。(本岡 武)

九州大学比較教育文化研究施設『東南及び南アジアにおける人間形成の総合的比較研究』第 2 集、1966. 98 p.

従来ヨーロッパ中心に道德教育の比較研究を遂行してきた本施設は、新たに研究の対象を東南アジアに向け、タイ国、インドにおける人間形成のリアルな姿を追求して世に問うたのが第 1 集であった。第 1 集においては、宗教がタイ人やインド人の人間形成にいかにか大きな役割を果たしているかを改めて深く認識させられたのであるが、第 2 集においてはタイ国における小学校、中学校の教科書を取り上げ、学校教育の場における人間形成の直接資料を提供している。ここに収められたのは中学 3 年の仏教教科書と小学 5・6・7 年用および中学 3 年用の社会科の教科書である。小学校では社会科は<国民の義務>となっており、中学校では社会科は<道德>となっている。難解なタイ国語から直接翻訳された貴重な研究資料であり、その分析の結果は後に刊行される予定とのことで、その刊行が待たれる。国語教科書もつづいて刊行される予定のようである。

仏教の教科書では仏陀の生涯、三宝五戒、五正善、仏陀の教えなどが主な教材となっており、むずかしい仏教の教説がかんでふくめるように解説されてある。

各章末には<問題>と<まとめ>とが用意され、教材が生徒に徹底的に習得されるように配慮されている。タイ国では仏教は国民の日常生活に深く浸透し、その精神生活の安定に役立っている。学校生活は合掌と「仏法僧に帰依します」という誓唱から始まる。教室の正面には仏像が安置され、毎週 1 回以上宗教の時間がある。この宗教の教えによって国民の道德生活も保たれており、宗教の外に道德はないのである。宗教と教育とを分離しているわが国では想像できない世界である。中学 3 年の社会科<道德>の教科書を見ても、仏教の教科書と内容において大きなちがいはない。ただ章末に<むずかしい言葉>と<質問>とが用意され、理解と整理に役立たせるよう配慮されている。親切な教科書という感じがする。

社会科<国民の義務>を見てみよう。歴史と地理という教科が別にあるので、社会科の内容はいわば公民科的なものになっている。教材は各学年 5 章から成る大単元主義である。「ぼくらの学校」というような手近な問題から「税金の徴収とその用途」というような大切だが縁遠くなりやすい問題にまでわたっている。その説明はきわめて懇切丁寧で、やや教訓的であるが、教師に絶対的な権威を持たせているのが目につく。その点わが国の社会科に見られたような「はいまわる自由主義」的な傾向は見られず、むしろ迫力を感じず。各章末には<まとめ>、<実践実行>、<問題>が用意され、道德教育としても行きとどいた配慮の中に力強さを感じず。道德教育においてタイ国は決して後進国とはいえないのではないか。(高木太郎)

Kramol Tongdhammachart. *American Policy in Southeast Asia 1945-1960, with Special Reference to Thailand, Burma and Indochina*. Bangkok: Faculty of Political Science, Chulalongkorn University, 1965. v+449 p.

チューラーロンコーン大学政治学部には、カモンという名前の若い学者が 2 人おり、2 人ともよく切れ、2 人とも政治史を得意とするが、これは、そのうちの国際政治をやるほうのカモンが、アメリカ留学中に、ヴァージニア大学に提出した学位論文である。チューラー大政治学部の Textbook Division から、学生の教科

書として出版されたもので、市販はされていない。

本書は、なによりもまず、タイの学者が、アメリカの東南アジア政策に、学問的に真正面から取り組んだ、恐らくはじめての試みとして注目される。

筆者は、アメリカの東南アジア政策の展開を、

- (1) non-involvement の時代 1945—1949,
- (2) cooperation の時代 1950—1954,
- (3) commitment の時代 1955—1960,

と3つの時期にわけて、タイ、ビルマ、インドシナの3国家地域を題材として、論じている。筆者は、概念図式として、interests→objectives→policiesの3つの概念のセットを駆使している。論理の展開は明確だし、文章も簡潔でクリアである。そのクリアな点は、本書の優れた特長のひとつであろう。また、豊富な文献をフルに駆使しているので、質的な厚味がでている点も評価したい。

筆者は、1945年から1960年にかけてのアメリカの政策に、つぎの5つの特徴を見出している。第1は、確固たる原則をもって臨むべき段階(特に1945—1949)に、便宜主義をもって臨み、現地側にいたずらに suspicions を招来せしめた。合衆国にたいする現地の不信感、植民地主義にはっきりとした原則的態度決定をしなかった40年代にはじまっているという。第2に、アメリカ政府は、非共産主義的な左翼への理解と洞察に欠けている。反共右翼に甘かったのは失敗であったと断じている。第3に、反共政策の方便として、経済発展よりもむしろ軍事力強化という実利政策に流れがちである。第4に、特に1955年以降、現地諸国の歓心を買うために、ドルを乱用する傾向にある。このやり方では、一時的な歓心は買えても長期的な忠誠は買えないという。第5に、アメリカ政府は、自己の万能性への過信、という欠点をもつ。その過信のために、地政学的な謙虚な読みもできなければ、現地の感情に素直に対応する心掛けも忘れがちになっているという。

この5つのコメントはいずれも鋭く、アメリカの政策の盲点を突いていて、大方の共感を買うはずである。

ただ、いささか気になるのは、筆者が、はたして、自分自身の心底の声として、この結論を出したのか、あるいは、タイ国の国家利益を読み込んだ上で、この結論に至ったのか、ということである。私の想像では、合衆国国内の反政府的なさまざまな論調を、本書

はうまく吸収しているのではなかろうか。チューラー大の若い学者に共通する、極度に没価値的たらんとする姿勢——つきつめると自分自身の価値観を抑制することにつながる姿勢、のかげりを本書にも見てとれる。いずれにせよ、本書のすべての論理展開が、アメリカ的にスマートであり、そこに、チューラーの政治学部の学風を見ることが可能である。

そのほか、各国の国家利益の捉え方にも一面的なところがあり、また一部の資料操作にも不注意な個所がある。それにも拘らず、やはり、ひとつの風格をもった理論展開は買えるし、高水準の論文として一読に値する。(矢野 暢)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course*, Book 1. Bangkok: AUA Language Center, 1966. vi+118 p.

新しく出たタイ語の入門書である。本書は教室での授業1時間に対してラボラトリー1½時間の割で進めて、全体を60時間で仕上げるように仕組まれている。ラボラトリーを使用しない場合は50時間で終わることができる。ただし、本書は、“Book 1”と示されているように、1冊だけでタイ語の全体を身につけたものではなく、ほんとうの入門段階だけを身につけたものである。さらに高い段階を習うには Book 2, Book 3 と進まなければならない。

全体は Introduction と 22 の Lessons よりなる。まず Introduction で全体の方針、およびタイ語の音素体系、表記法について説明する。各 Lesson は (1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialog, (5) Consonant Contrast, (6) Tone Contrast, (7) Taped Drills, (8) Numbers, (9) Thai Writing System と 9 つの sections より成る。本書の特色として、Tone の練習の際、単調な発音練習とちがって、色々な入れかえ練習や、応答練習を用いている点をあげることができる。例えばタイ語における 5 つの tones を練習するのに、ただこれらを並べるだけでなく、/dii máj/, /jùu máj/, /dāj máj/, /róon máj/, /sūaj máj/ というような入れかえによる練習をさせる。Tone Practice のみならず、他の sections もすべて、理論的な説明はいっさいはぶき、くりかえし訓練させることを目指している。本書の各

lesson を徹底的に master すれば、かなり能率よくタイ語の話し言葉を習うことができるであろう。

ただ忘れてならないことは、本書が英語を母国語とする者のために書かれたものであると言う点、および native speaker の指導のもとに教室で使用されることを予想するもので、ほんとうの意味での「独習書」ではないと言う点である。したがって、日本人からみれば説明不足な点とか、あるいは分り切ったことをくどくど説明している点などが目につくのは仕方ないだろう。また、本書を native speaker の助けなしに全くの独習用に使用しても、おそらく大した効果は得られないであろう。この点をよくわきまえ、適当な指導者なりすぐれた録音テープなりがあれば、日本人でも充分使用することができるであろう。

本書をざっと読み通して感じられることは、やはり、アメリカにおける言語教授法の発達と言うことである。一見何でもなさそうな本であるが、実に能率よく憶えるように仕込まれている。ややこしい理論をくどくどと説明するのでもなければ、ただ「慣れる憶える」と言うわけでもない。本書の編集者が、科学的な言語学の知識を身につけた人であることはすぐわかるであろう。しかし、その知識を言語学習と言う実際的な目的のためにうまく利用しており、決して言語学を教えようとはしていない。新しい教授法に対する批判は色々あるだろうが、少なくとも今までのものよりはすぐれていることは事実である。(桂満希郎)

David E. Sopher. *The Sea Nomads, A Study based on the Literature of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. (Memoirs of the National Museum, No.5) Singapore: The National Museum, 1965. x+422 p.

本書は、東南アジア島嶼部沿岸において、家族ごと舟の上に住みながら沿岸を“nomad”のように移動していく生活を送る民の文献的な研究である。従来このような民を呼称するのに Sea Gypsies とか Orang Laut とかを使用することが多かったが、著者はこれら全部を総称する語として“Sea Nomads”を採用する。この海上放浪民に接近して調査するのは極めて困難なことであり、文献資料も旅行記、行政誌などの片隅に思いがけなく見出されるものが多かっただけに、

この文献資料の集成をはかった本書は、大変貴重なものであろう。

内容は5部にわかれている。第1部は、環境条件すなわち生態学的な考察をマレーシア(広義の)における strand, sea について行なっている。環境条件によって(1) Sea Nomads, (2) Strand Folk, (3) Forest People に大きく、“primitive”文化を有する民が三分されることは著者の地理的前提である。

第2部と第3部は、いわば「現代研究」であって、19世紀・20世紀の文献を中心として Nomadic Boat People の記述と比較を試みている。なかでも第2部の各海上放浪民の記述は著者の意図はともかく、本書の中核をなすものであって、情報源、呼び名、分布範囲、経済、文化的特徴などについて、できる限りの情報を集成してある。彼の研究によれば、地域的には、

(1) マレー半島西岸グループ (Mawken, Orang Laut Kappir) (2) 南支那海グループ (a. Riouw-Lingga Arch. & Adjoining Coasts: Orang Laut Pesukuan, Orang Seletar; b. The Pulau Tujuh: Orang Laut; c. Bangka, Billiton & Adjacent Coasts: Sekah, Suku Juru.) (3) 北ボルネオ・スールー諸島グループ (Bajaus, Lutangos, Samals) (4) 東インドネシアグループ (Bajaus, Orang Johor, Turijene, Wong Kambang) の4つに大きく分けられる。第3部の物質的・文化的特徴の比較分析は、資料の不完全さにさまたげられて彼の思うように分析されないのは気の毒である。

第4部は、歴史的な概観であって、19世紀以前の資料を、イギリス・オランダ・スペイン・ポルトガルおよび二次資料ではあるが、1500年以前の中国・アラビアの文献も参照している。

以上のような記述・分析比較・歴史的展望を終えてから、結論として、海上放浪民の移動と起源との考察をする。この仕事は、海上放浪民文化の再建設ということを経験としたものではあるが、「文化史再構築」学者の飛び越えた結論というものを持ち出すのではなく、操作できる資料で得られる結論のみを読者に呈示している。リオー・リング、バンカ・ピリトン諸島附近および南西セレベス沿岸の2地域を移動の源となった地域として設定するのも妥当な帰納といえる。

問題の焦点は、文化接触、文化変容ということにしばられそうであるが、著者が最後のページで僅かに言

及している retrogression の側面は、海上放浪民という比較的孤立した生活を送る民の場合もっと注意が払われても良かったと思う。類似点を求めるのに急なあまり、独立の innovation ということも見落されがちである。また、著者は何の説明もなく、high, middle, primitive cultures ということばを頻繁に使用しているが、これらの相違について説明が欲しいものである。

なお、この論文は、1954年にカリフォルニア大学（バークレイ）へ博士（Ph. D.）論文として提出されたものである。（前田成文）

John Bastin & R. Roolvink (eds.) *Malayan and Indonesian Studies, Essays presented to Sir Richard Winstedt on his Eighty-fifth Birthday*. Oxford Univ. Press, 1964. xii + 357 p.

マラヤにおいて、「最後のそして最も偉大な」(Bastin) 英国植民地学者の、リチャード・ウィンステッド卿の85才の誕生日（1963年）を記念して、彼に献梓された19の論文集である。2人の編者は、かつてマラヤ大学の歴史科およびマレー研究科の教授であったが、現在は各タイギリスとオランダに帰っている。

ウィンステッドの著作活動が、言語・文学・歴史・経済・工芸・法律・宗教と、音楽以外のマレー文化の殆んど全域を覆うものであったように、本書も執筆者の国籍・専門分野ともに多種多忙で、彼の面目を躍如とさせている。

バスティンの巻頭の「序」と Zainal-Abidin b. Ahmad の巻末のマレー語による「マレー研究におけるリチャード卿の貢献」によって、ウィンステッドの業績を知ることができる。但し、書物の出版年代等両者の間に不統一があり、ウィンステッドの“A History of Malaya”の日本語訳として太平洋協会の「マライ史」と野口勇訳の「マレーの歴史・自然・文化」を掲げているが（p. 11）、後者は、ウィンステッドの編集した1923年の Malaya の訳ではないか。

古代史に関しては、フランスの G. Coèdes がスマトラのパレンバンに Keduhan Bukit 碑 (Sri Vijaya 朝) の再解釈と、カリフォルニア大の Paul Wheatley のマレー半島の古代史を、地域名の正確な identifi-

cation という点から問題を提供している。更にマラッカが海港として栄える以前の東南アジアの経済史をひもとく鍵として、クラ海峡の Takuapa の問題を Alastair Lamb (マラヤ大学) が扱っている。

マラヤの近代史というと殆んど、15、6世紀以降から叙述されるが、このカテゴリーに入る論文は7つを数える。Wang Gungwu (マラヤ大学) は、初期マラッカの歴史を中国史料から検討し、1403-5の中国マラヤ関係の始まりを説く。C.R. Boxer は、英語文献の少ない、1629のアッチェ人のマラッカ襲撃に光を投げるポルトガル資料を3つ英訳紹介の労をとっている。D.K. Bassett (マラヤ大学) は、18世紀後半のマレー半島を、英国の商業戦略的関心から見る。英国の統治に関しては、C.M. Turnbull と Emily Sadka との2つの論文がある。バスティンは、往々マレーシア人はウィンステッドの歴史視点は受け入れられず、マレーシアの歴史はマレーシア人の手でと主張するが、subject-matter に関する限り、ウィンステッド程、マレー人の視点に立ってマラヤの歴史を解釈したものはないではないかと強調する。そして、マラヤ近代史に歴史上の実在人物のパーソナリティの研究に欠けていることを鋭く指摘して、今後のマラヤ歴史研究の方向を示唆している。C. Skinner は、19世紀のマラヤ、タイ関係理解の為に、バンコックに残っている1839年の Kedah letter の紹介をしている。

ウィンステッドへのこの論文集の中にあって特異なのは、L.A.P. Gosling の現地調査に基く Trengganu 州の Baba Chinese の移動と同化とを追跡した論文と、C. Geertz のバリ島における最近の宗教的变化 (Internal Conversion) とを扱った論とであろう。

言語・文化に関しては6つの論文がある。マレー編年史の起源と本質とを2人のオランダ人学者が各々論じている。A. Teeuw と P.E. de Josselin de Jong である。R. Roolvink, P. Voorhoeve, C. Hooykaas などの大家も各々文献校訂をしている。インドネシア文学専門の A.H. Johns は、Amir Hamzah を、その詩的生长発展過程を追いながら「マレーの王子であってインドネシアの詩人」という風に位置づけている。

多くの Festschrift がそうであるように、全体としての統一は無いが、一つ一つの論文は各々の専門家にとって参考になろう。（前田成文）